付録②　命あることば

出典　『日本語の力』（集英社文庫　二〇〇六年）

　十世紀の初めにできた『古今和歌集』には卓抜な序文がついていて、和歌とは何かを明確に規定している。

　力をも入れずしてを動かし、目に見えぬをもあはれと思はせ、の中をも和らげ、きの心をも慰むるは歌なり。（「仮名序」）

　ここで説く和歌の力は四つ。［　　Ａ　　］を変える力、魂や心を感動させる力、［　　Ｂ　　］の愛をつなぐ力、そしてを鎮める力である。具体的にに祈って雨を降らせたり、穀をみのらせたりする力。影も形も見えないから、存在しないかに見えながら、もっとも強く物事を操作している体内の霊格まで感動させて、美醜、善悪を判断させる力。和歌を交わし合うことで愛を伝達しうる力。そして粗暴の者にもやさしい感情を起こさせる力、そのようなものであろう。

　しかし押しなべていえることは、和歌がもつふしぎな力である。機械力でも腕力でもいい、具体的ないかなる力でも不可能なことを可能にしてしまう力を歌はもつというのである。ふしぎの物に訴えかけ、ふしぎの結末をもたらす、ふしぎの力。和歌はそれをもつという。なぜであろう。散文だって、同じ日本語だのに。

　地球上の人種にさまざまな呼吸の仕方があるなかで、そもそも五七調とは、自然な日本人の呼吸法によるものだという。それに従うなら、和歌はごく本質的で生命的な形で発せられるのだから、われわれの人為をこえた、命そのものと響き合う形式にととのえられたことばだと、いうことになる。

　この和歌観は、が、①人間がもつ始原的な感動―もののあわれを述べるのが和歌だといったことと、実体がひとしい。いわば、生命のリズムとしてことばが発露すること、それがふしぎの物との交霊に成功するというのが、②『古今和歌集』序文作者の主張であった。神から授けられることばは和歌のことばで発せられ、人間は祈りを和歌のことばで捧げる。愛は命のことばによって芽生え、武士は命のことばによって荒魂をとすることができる。

　この意見は事例を現代ふうに変えれば、いささかも違和感がない。もっとも力強く霊魂と交信さえできることばは、生き生きとした、命あふれたことばであろう。喜びにつけ悲しみにつけ、和歌となって体から奔流することばこそがしい。虚飾にみちたことばは、何の役にも立たないのである。

　真率な命のことばをもとう。それが美しく生きるこつである。

語注　＊天神地祇＝天つ神と国つ神。すべての神々。

　　＊五穀＝人が常食とする五種の穀物。

【原文】

　十世紀の初めにできた『古今和歌集』には卓抜な序文がついていて、和歌とは何かを明確に規定している。

　力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。　　　（「仮名序」）

　ここで説く和歌の力は四つ。天地を変える力、魂や心を感動させる力、男女の愛をつなぐ力、そして荒魂を鎮める力である。具体的には天神地祇に祈って雨を降らせたり、五穀をみのらせたりする力。影も形も見えないから、存在しないかに見えながら、もっとも強く物事を操作している体内の霊格まで感動させて、美醜、善悪を判断させる力。和歌を交わし合うことで愛を伝達しうる力。そして粗暴の者にもやさしい感情を起こさせる力、そのようなものであろう。

　しかし押しなべていえることは、和歌がもつふしぎな力である。機械力でも腕力でもいい、具体的ないかなる力でも不可能なことを可能にしてしまう力を歌はもつというのである。ふしぎの物に訴えかけ、ふしぎの結末をもたらす、ふしぎの力。和歌はそれをもつという。なぜであろう。散文だって、同じ日本語だのに。

　地球上の人種にさまざまな呼吸の仕方があるなかで、そもそも五七調とは、自然な日本人の呼吸法によるものだという。それに従うなら、和歌はごく本質的で生命的な形で発せられるのだから、われわれの人為をこえた、命そのものと響き合う形式にととのえられたことばだと、いうことになる。

　この和歌観は、本居宣長が、人間がもつ始原的な感動―もののあわれを述べるのが和歌だといったことと、実体がひとしい。いわば、生命のリズムとしてことばが発露すること、それがふしぎの物との交霊に成功するというのが、『古今和歌集』序文作者の主張であった。神から授けられることばは和歌のことばで発せられ、人間は祈りを和歌のことばで捧げる。愛は命のことばによって芽生え、武士は命のことばによって荒魂を和魂とすることができる。

　この意見は事例を現代ふうに変えれば、いささかも違和感がない。もっとも力強く霊魂と交信さえできることばは、生き生きとした、命あふれたことばであろう。喜びにつけ悲しみにつけ、和歌となって体から奔流することばこそが逞しい。虚飾にみちたことばは、何の役にも立たないのである。

　真率な命のことばをもとう。それが美しく生きるこつである。

問一　空欄Ａ・Ｂに入る適当な語句を、直前の「仮名序」の中から探して答えよ。〈6点×2〉

Ａ〔　　　　　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　　　　　〕

問二　次のア～エの文は、本居宣長が『源氏物語玉の』で記したものである。傍線部①の考えが最も端的に表れているものを選べ。〈8点〉

ア　昔の事を、今のわが身にひきあて、なずらへて、昔の人の物のあはれをも、思ひやり、おのが身のうへをもむかしにくらべみて、もののあはれをしり、うきをも思ひなぐさむるわざ。

イ　あはれといふはもと、見るものきくものふるる事に、心の感じて出る、の声にて、今の俗言にも、「ああ」といひ、「はれ」といふ也。

ウ　大かた物のあはれをしり、なさけて、よの中の人の情にかなへるを、よしとし、物のあはれをしらず、なさけなくて、よの人のこころにかなはざるを、わろしとはせり。

エ　さて物語は、物のあはれをしるを、むねとはしたるに、そのすぢにいたりては、儒仏の教へには、そむける事もおほきぞかし。

〔　　　〕

問三　傍線部②はだれか。漢字で記せ。〈5点〉

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

問四　『古今和歌集』と同じく、天皇の命で作られた勅撰和歌集を次から一つ選べ。〈5点〉

ア　和歌集　　イ　集　　ウ　和歌集　　エ　集

〔　　　〕

【解答】

問一　Ａ＝天地　Ｂ＝男女〈6点×2〉

問二　イ〈8点〉

問三　紀貫之〈5点〉

問四　ア〈5点〉